



2006
No. 4

The Natural Science Publishers' Association of Japan

自然科学書協会会報

発行人・志村 幸雄
編集・広報委員会
発行・2006年11月8日

社団法人 自然科学書協会

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-101 文化産業信用組合内 TEL03-3292-8281

URL: //www.nspa.or.jp

● 創立60周年記念特集号

1946(昭和21)年に産声を上げた(社)自然科学書協会は、今年創立60周年を迎えました。11月8日、関係者を招いて日本出版クラブ会館で記念祝賀会を行ないますが、本号ではそれを記念して、首都大学東京・西澤潤一学長の自然科学と本に関するエッセイに加え、協会の活動に尽力された方々にそれぞれ思い出をまとめていただき、創立60周年記念特集号としました。

● わたしと読書

自然科学と本の役割

首都大学東京・学長 西澤 潤一

東洋の科学は現場観察を基盤として発達したが、西洋の科学は一般普遍を条件としたエッセンス主義だとも言えるであろう。明治期は西欧文明の流入が急速に行われてきた結果、かなり未消化のまま入ってきた分野も決して少なくはないが、当時の日本人は概して主体性を維持していたから、経験主義に根ざした哲学的展開という点では極めて健全なかたちで形成された分野がほとんどであったと言えなくもない。

このような社会環境の下では、専門家の興味の周辺を畑とする一般向けの出版もまた同じ傾向を示すことになる。専門書では演繹型の著作が主流となったのに対して、基礎的というか、哲学的というか、単なる事象の記録に留まらず、それを基にした思考の結果得られるエッセンスを追求する帰納型のありかた



についての著作は、主に専門書以外に任された感があった。

戦前、いわば文系全盛時代には、言い過ぎかもしれないが、理系の専門書というのは、いわば無味乾燥で、現場や事象の記述すら乏しく、一般の出版物としては、せいぜい伝記物がある程度で、科学書はきわめて乏しく、数も少なかった。しかし、その数少ない出版物の多くは珠玉の美しさを湛えたもので、私が読んで感銘を受けたものは、

アインシュタイン、インフェルト『物理学はいかに創られたか』

ドゥ・ブロイ『物質と光』

ポアンカレ『科学と仮説』

ガモフ『不思議の国のトムキンス』

ガモフ『太陽の誕生と死』

ブリッジマン『現代物理学の論理』

等々、並べていけば相当の冊数になる。その中心になるところは、岩波新書や創元科学叢書の二大グループに代表されるものであった。

これ以外にも、紹介したいなかなかの良書があるが、本題を急がせていただく。これらの本を並べていくと、今日でも替える必要のない質の高い書がかなりあり、いま新しい書籍をこのように並べてみようとしても、あまり思いつかない。

畏友ノーベル賞受賞者ヘルベルト・クレマー博士によれば、博士がドイツ敗戦に至るまで在学していたゲッチンゲン大学の物理学教室には、ハイゼンベルクとシュレーディンガーという、哲学的物理学の双璧とも言うべき超大教授が在籍されていたが、聴講していた学生の中には講義が理解できたものは全くいなかったらしい。彼らはむしろアブラハム・ベッカーの講義を聞いて電磁気学を理解していたのであったが、ベッカーは生物学科卒業であって、言うなれば電磁気学は素人であった。それでも、学生達はハイゼンベルクとシュレーディンガーの講義を聞くことによって物理学研究者の雰囲気を感じ取っていたので、この中から多くの基礎物理学者を生むことになったという。

当時の若い日本の学者や学生達は、このような雰囲気に酔うために一般書を求めたといっても言いすぎではあるまい。今は残念ながら、このような学生どころか学者すらいなくなってきた、と専門家に言われる恐るべき時代である。これなるが故に自然科学書の苦悩が始まっているとも言えるのではないだろうか。

それでは文系はどうかというと、理系と同様、あるいはさらに強烈な逆波、いや、それ以上の倒壊すら起こっている。

筆者は、東北大学総長時代に、「国際文化」と「情報科学」という二つの大学院を設置させていただいたが、前者は文化という基本知的財産の世界にまず現場主義の柱を立てたつもりであったし、後者は、本来一体と考えてもよい文理の二分野に共通する学問形態を統一的に論ずべき21世紀に最も重要な学術分野を設定したつもりであった。

しかし、文系を代表する社会科学においては、社会という現場における左翼の崩壊によって、今や社会を現場として受け止め、新しい学術を誕生あるいは発展させる、現場から学術への帰還（フィードバック）がほとんどといってよいほど行われていないことに気づいたのである。社会主義とかマルクス主義とか言われる（私は正しいと思っていないが）学術の衰退のあとをうける学術の現状は、欠陥状態というよりも、端的に言って惨状を呈していると言った方がよい。したがって、研究の手段としての出版が理系とは比較にならないほど重要であるはずなのに、文系出版物はまさに中心にアナが開いた状態とも言え、この際、社会科学の研究者には現場を確認していただく以外にこの分野が回復する道はないのではないだろうか。正に激動の時代であると言える。

このような文系の社会科学と比較すれば、自然科学における今後の見通しは、遙かによく把握されており、その中で出版にお願いしたい事項もまた明白であろう。

むしろ、今日、入学試験におけるマルチプルチョイス（いわゆるマルバツ式）のあまりにも強烈な慣行によって、記憶しているだけで考えていない、つまり、知識が智能に発達していないことに起因する書籍の有効性の低落成りが出版の効率を低落させた源だと言えるのではないだろうか。

そして、同じ智能の発達が著しく低落したために起こったと言ってよい創造とか補完能力の低下が、経済とか労働効率の低下となって国力の指標にも現われてきている。こうなれば、いかに厚顔な指導者といえども、責任の転嫁で済ませられなくなってくるはずである。

すでに大学にとって喜ばしい二、三の出版が行なわれている。その一つは、みすず書房発行で、電磁気学や重力理論の発達を現場から掘り起こして学術の発達に結びつけた山本義隆『磁力と重力の発見』である。ただし、

この本はあまりにも専門的になっているので、このような内容を小・中学生向きにノック・ダウンした出版を望みたい。

もちろん、筆者は昔から折にふれ、科学史の重要性を唱え続けてきた。筆者が感銘を受けた科学史の本はいくつかあるが、最も強く印象に残っているのは、天野清先生の『量子力学史』である。この本を読むと、理論構成の意味がよくわかり、創造者達の人間的な努力が理解でき、これが自らの創造に結びつくような気がするからである。私がこうしたことについて印刷物に書いたのは、共立出版から出た電子工学講座に入っている私の著書の序文だったと思うから、おそらく昭和35年以前のことである。最近、米澤富美子先生が、岩波新書『人物で語る物理入門』をお出しになり、物理学者の伝記を並べるかたちで物理学の発達を歴史を記述された。私も及ばずながら、未だ部分的なものではあるが、戦略的創造科学の展開に関する一書『戦略的独創開発』を、工業調査会から出版させていただいた。このような書物がなんとか早くブームになるようにしていかなければ、日本の科学技術も、そのあり方の問題点は解決できないのではないだろうか。

● 思い出

協会とのかかわりを振り返る

朝倉書店 朝倉 邦造

自然科学書協会は、ご存知のようにわれわれの先輩達が終戦直後の荒廃した社会の中で、特に用紙は配給票を受けても入手困難な状況であったが、良書を継続して刊行し日本の科学技術の発展に資する出版事業を健全に立ち上げるため、1946（昭和21）年に任意団体として会員社56社で創設されました。当協会の創設当時の事情また発展の経緯は、50年史に詳述されていますので、ここでは私自身と協

会とのかかわりを振り返ってみます。

1977（昭和52）年7月に、培風館の山本俊一社長が5代目の自然科学書協会理事長に就かれました。私の中学の大先輩でもあった山本理事長から「この際、業界のことを勉強なさい」ということで理事の末席に加えてくださったのが、当協会に深くかかわるようになったはじめでした。まだ若かったのでほんとうに勉強させていただきました。

山本理事長のあとは、三井正光オーム社社長が1979（昭和54）年に理事長になりましたが、私は引き続き理事として務め、この時の忘れられない思い出の一つが、1983（昭和58）年5月26日～28日に行った、私が若い頃に勤務していた三菱製紙・八戸工場の見学と一関市内の書店訪問の研修旅行です。ちょうど前年に東北新幹線が盛岡まで開業しましたので、上野から盛岡までは新幹線、盛岡から八戸までは在来線に乗り換えるといったコースでした。見学団一行30数名でしたが、盛岡までは快調な旅で昼前に着きました。弁当も買い込んで在来線に乗り換え、さあ昼食でもと寛いだ気分になった矢先に突然列車がストップしてしまいました。11時59分秋田県能代市西方沖に発生し、津波などで国内104名もの犠牲者を出したあの「日本海中部地震」という大地震だったのです。地震とわかった時から他の乗客達は弁当の買占めに走り、たまたま隣の列車に乗り合わせていた修学旅行の小学生達は昼食の用意ができなくなり、困っていました。引率の先生が、子供達は長い間費用を積み立て楽しみにしてきた修学旅行なのにと嘆いていましたが、手助けしようにも旅先で何もしてやれなかったのがいまでも心残りです。

その夜の宿泊は八戸から十和田へ向かう途中の山深いところにある温泉、美文調の名文で有名な明治期の文人・大町桂月がこよなく愛した蔦温泉でした。しかし、地震の影響で三菱製紙・八戸工場の見学時間が予定より数時間ずれ込み、宿への到着が夜11時頃になってしまいました。急遽、宴会は取り止め、食

事だけを夜中にとることになってしまいました。当時は携帯電話などのような便利なものもなく、こちらから家族、会社への連絡も容易にはできず、安否を気遣う家族や会社からの電話が宿に殺到し、私達は汗だくとなって深夜まで対応しました。当時の自然科学書協会の研修旅行には、飛行機旅行はタブーとなっていました。大地震で列車が止まるとは思っていませんでした。

1985（昭和60）年には、国際科学技術博覧会、いわゆる「科学万博」が、つくば市で開催されました。自然科学書協会にとっては書籍宣伝の絶好の機会であり、会期中ブックフェアを開けるようにすべく「実行委員会」を設け、その後、出版業界あげての組織「つくば85出版協議会」に発展し、私は出展委員会副委員長として微力を尽くすこととなりました。いろいろと問題が起りましたが、紆余曲折を経て万博もブックフェアも成功裏に終わり、いまでは懐かしい思い出となっています。

1985（昭和60）年6月に第7代理事長として吉本馨工業調査会社社長が就任されました。私は理事長より要請され諸先輩をさしおいて専務理事となりました。ところが8月に理事長より電話がはいり、体調不良で長期療養するからあとを頼むといわれました。1期2年の任期がほぼまるまる残っていたのですが、1987（昭和62）年に、第8代理事長として南

條正男共立出版社長が選出されるまで理事長代行を務めました。

南條理事長のあとは私の大学の先輩でもある金原秀雄金原出版社長が1991（平成3）年に理事長となり、そのあとを継ぐ形で私は1995（平成7）年7月、10代目の理事長に就きました。

その後、私は日本書籍出版協会の理事長に就任しましたので2002（平成14）年7月に自然科学書協会の理事長を退き、あとを志村幸雄工業調査会会長に引き継いでいただくことにしました。あしかけ3期半の理事長を含めて30年の間、理事として当協会にかかわってきたこととなります。

この間には、「笹塚コピー問題」、「消費税施行＝内税方式か外税方式か」、「日本複写権センター設立」など、日本の出版界の将来を左右するような大きな問題が多発し、そのつど会員の皆様と力を合わせ問題解決に尽力してきました。これらに触れるには紙数もつきましましたのでやめますが、最後に1984（昭和59）年、本四連絡架橋工事見学と川崎医科大学、岡山市内書店訪問の研修旅行に行った際のエピソードを紹介します。たまたま医科大生の解剖実習を見る機会がありました。この時、実習に臨む学生が、献体に協力してくれた人に感謝し、神棚に向かって手を合わせ拝む姿をみて人間としての美しさに深く感動しました。

当協会がこれからの日本の出版界の中心としてさらにいっそう活動し社会の付託にこたえていくよう、私もお微力を尽くすつもりでいますことを記し、終わりとします。

再販制度廃止反対への取り組み

元・岩波書店 石崎津義男

大正時代、出版物は定価の1割以上を割引かせて買う慣習があった。のちにそれが高じて、極端な廉売やおとり販売等の不当な競争を呼び、小売書店の利益を侵害するばかりか、弊害は読者にまで及んだ。

協会マークの由来

今日も協会刊行物などにも使われ親しまれている当協会のマークについて『自然科学書協会20年の歩み』（1966年12月）に八木佐吉氏（丸善）の談話が載っているので再録する。

「マークを作ろうというのは昭和23年3月頃でした。その頃目録を作るのにマークが必要だということになって、NSPAの頭文字と世界に知識を求めるところから地球を使ってということで、雑誌『平凡』の挿絵を描いている私の甥の古川龍三に図案化を頼んだものがこのマークで、出来上がったものは割合好評で皆さんに親しまれてきました。」



この問題を解決すべく、東京の書籍・雑誌商組合は大正8（1919）年に定価販売励行を始めた。5年後には、それが日本全国に広がっていった。

出版物の自由売価は古書籍業に任された。古書には定価を上回る高値のものもある。需給関係による自由な売値である。

以後、新刊出版物の定価販売は日本人の常識となった。

再販制度の発端はロシア革命の1年余り後であった。革命によって上から作られたソヴェト体制は70年後に崩壊したが、市民の智恵によって始められた再販制度はそれを超えてなお存続している。

昭和54（1979）年、公正取引委員会の橋口委員長はこのような事情を理解することなく、部分再販・時限再販・「定価」明示等を決定するとともに、出版物は発行者の意思によって非再販商品とすることを可能とした。

平成7（1995）年、公正取引委員会と行政改革委員会は、日米貿易不均衡の是正に乗じて、再販制度廃止の方向を打ち出した。

この時、自然科学書協会はいち早く1995年3月10日付で「出版物の再販制度廃止に反対する」という声明を出した。つづいて同年11月22日に「再び再販制度廃止に反対する」という声明を発表した。

同年12月6日には、理事長ほか理事数名が公正取引委員会に鈴木課長を訪ね、再販制度の必要を改めて強調した。

これら一連の行動を通して、自然科学書協会は再販制度廃止に断固反対の姿勢を毅然として示した。

反対声明は、会員外の150社を超す専門書版元からも賛同を得ることとなった。

この時の自然科学書協会の対応は見事であった。業界には“官”の指向に対して弱腰の社もあったが、自然科学書協会の中にはその影さえ見られなかった。そこには、長年専門書の出版を通じて日本の科学文化に寄与してきたという自信があった。当時の協会の姿は、

いまなお記憶に新しい。

その自然科学書協会が創立60周年を迎えた。まことに喜ばしい限りである。歴史を顧みながら、さらなる地道な活動と発展を心から祈念してやまない。

そうそうたる方々が綺羅星のごとく

昭晃堂 阿井 國昭

私が自然科学書協会とかかわりを持ったのは、20代の後半で40年以上も前のことでした。父が理事を務めていたこともあり、きっかけは代理出席でした。代理で参りました、と告げますと、「よく来たね、マッそこへお掛けなさい」と優しく声を掛けて下さったのは下出源七氏でした。会場には、金原作輔氏、江草四郎氏、朝倉鑛造氏、藤田末治氏等そうそうたる方々が、綺羅星の如く居並んでおられました。

当時の理事会の平均年齢は73歳ぐらい（推定）でしたから、何とも場違いな所へ迷い込んでしまったものだと、身を固くしておりました。その時の若手の方で強く印象に残ったのは、南條安昭氏、吉野元章氏のお二人で、てきぱきとして要領を得たその言動は、私の目にはまるで青年将校のように映りました。

この方々が次代の協会を担っていかれるのだなと思っておりましたが、不運にもその後間もなく、全日空の飛行機事故で他界され、将来ある逸材を失ったことは協会はもとより業界全体にとっても大きな損失となり、誠に残念の極みでありました。

また、ある時、箱根・環翠楼での会合に代理出席したことがありました。仲居さんに案内されて部屋へ参りますと、理事長の今田見信氏が浴衣に着替えながら、私をジロジロと眺め、「アナタね！ 部屋をお間違いではないでしょうか？ ここは自然科学書協会というところの理事の部屋ですが」と、おっしゃいます。父の代理で参りました、と申し上げますと、「わかりました、どうぞ」と言われましたが、皆様御長老の方ばかりなので困って

おりますと、内山勇次氏が若い人の部屋に代わってもらいなさいと、気を利かせて下さり、幹事部屋へ移りました。それでも親睦委員長の小野慎一郎氏をはじめとし、年令は多少若返った程度でした。

その後40歳で理事に推挙していただき、大してお役にも立てないままに長い間務めさせていただきました。創立50周年記念の折には、総務委員長として微力ながら式典の企画に携わり、また御招待客の人選、人数、予算等や会場の設営にも委員の皆様と種々頭を悩ませたことが懐かしく思い出されます。早いもので、あれから10年の歳月が流れ、11月8日には60周年記念祝賀会が挙行されるとのことです。前回にも増して、内容のある立派な記念祝賀会となりますよう、楽しみにしております。どうか皆様方のお力で成功裏に導かれますことを、心からお祈り申し上げます。

事務局勤務評定

文化産業信用組合 大谷 健美

文化産業信用組合本部業務部に自然科学担当という部署があります。1957(昭和32)年、当時の東京出版信用組合本店に自然科学書協会の事務局が設けられ、3代目下出源七理事長就任以降、事業活動が一段と活発化しました。

当初、「預金だ!」「貸出だ!」といっている職場の中で、事務局は事業内容さえわから



元・事務局員の吉弘幸枝さん(前右)。中川廣一(後左)、岡田婦美子(前左)の両氏と筆者

ぬまま、下出理事長の指示に右往左往する、まったく草創期の段階の様相を呈していました。この部署には、多士済々?の人材が配置されていきました。

当時の担当者は、若手のホープで理事長の信任も厚く、万事そつなくこなし、事務局の輪郭を形作りました。

協会の活動も益々活発となり、その作業内容から組合でも本腰を入れなければと、次に新卒の人材を投入しましたが、金融機関に就職したと思った本人は大変面食らった様子でした。その後彼とは残業帰りに一杯飲む仲となり、当時の書店視察旅行の内容の濃さ?、会員の方々の仕事振り、玄人はだしの趣味等々、雲上人の世界の話聞いておりました。彼の性格は会員の方々に好意を持たれ、遂には絶対不可能と言われていた下出理事長ご夫妻に媒酌の役を受けていただき、超緊張の結婚式を挙げました。因みにその司会を私が担当いたしました。

その彼も事務局担当があまり長期間になると、本来の金融機関の業務習熟に遅れを取ることから現場に戻り、最終は常務理事を勤めました。

その後事務局は益々多忙になり、充実を求められたことから組合は中堅のエース級の人材を投入、何れも現場に戻ってからは支店長級の役職に就いております。

昭和50年代に入り、経営陣の判断か、人事の巡り合わせか、一線を退いた定年間際の人達が次々送り込まれ、なかには首をかしげるような人もおり、協会には大変ご迷惑をお掛けした時代であったかと思えます。しかし昭和60年代には業界との関係を見直す機運の下に、事務局向けの人選を行い、至らぬことは多々ながら一生懸命務めた時代でした。

平成に入り、ある年の面接で自然科学向きだと直感し採用した女性(吉弘幸枝さん)がおります。入組研修では、預金・貸出・為替の教育を受けましたが、いきなり事務局担当の辞令を出しました。当初戸惑っておりまし

たが、会員皆様の暖かい包容力と、徹底した教育？で事務局の仕事に同化していきました。ただ、最後まで金融機関の仕事に携わることなく退職したことは、彼女に大変申し訳なく思っております。

最近、組合の中で〇〇商事といわれ、製本から棚の取付けまで器用にこなす人材が担当しておりましたが、定年退職しました。

昨今は金融庁の指導もあり、長期間同一職場での勤務は好ましくないとされ、この方針に沿った人事をせざるを得ない状況にあります。会員の皆様には平素多大のご支援をいただき、文信としても、出版業界への接点の起点でもある自然科学書協会との関係を、大事にしていかなければならないと常に考えております。

● 創立60周年記念特別委員会委員

- <委員長> 志村 幸雄 (工業調査会)
 <副委員長> 本郷 允彦 (南江堂)
 <委員> 朝倉 邦造 (朝倉書店)
 金原 優 (医学書院)
 宮部 信明 (岩波書店)
 佐藤 政次 (オーム社)
 曾根 良介 (化学同人)
 南條 光章 (共立出版)
 長 祥隆 (技報堂出版)
 筑紫 恒男 (建帛社)
 牛来 辰巳 (コロナ社)
 飯塚 尚彦 (産業図書)
 後藤 武 (彰国社)
 山口 雅己 (東京大学出版会)
 平田 直 (中山書店)
 山本 格 (培風館)
 松嶋 徹 (丸善)
 及川 清 (養賢堂)

● 平成18年功労者表彰者

協会発展の尽力に対する平成18年功労者11名が、創立60周年記念祝賀会において表彰されます。

- 朝倉 邦造 (朝倉書店)
 今井 康之 (元・岩波書店)
 長 祥隆 (技報堂出版)
 金原 秀雄 (元・金原出版)
 牛来 辰巳 (コロナ社)
 佐藤 政次 (オーム社)

- 志村 幸雄 (工業調査会)
 杉本 幹夫 (元・日刊工業新聞社)
 増田 誠 (元・日刊工業新聞社)
 深山 恒雄 (元・丸善)
 森北 肇 (森北出版)

専門書出版の未来を大学図書館の視点から

— 3団体共催の研修会に150名 —

録書房 渡邊 裕

7月25日午後4時より、出版クラブ会館において「IT社会における専門書出版の未来—大学図書館からの視点—」をテーマに、自然科学書協会・出版梓会・大学出版部協会の3団体の共催による研修会が行われた。共催であったことに加え、編集現場にとって、また経営的にも関心度の高いテーマであったことから約150名もの聴講者が集まり、会場は熱気につつまれた。

講師は千葉大学図書館長・文学部教授の土屋俊氏。20年前にシリコンバレーでのインターネットの普及を目の当たりにし、大学でのインターネット導入に尽力してきた人物である。

講演内容は大きく分けて、大学図書館のここ数年間での変化についてと、将来の出版ビジネスモデルの提言の二つであった。

土屋氏はまず、欧米では専門書を中心に電子ジャーナルや書籍をフルテキストで公開する流れがおき、今まで購入していた雑誌のかわりに、複数のタイトルをパッケージしたデータベースを大学図書館が購入するケースが増加しているとし、またその傾向は年々



土屋俊氏



出版社にとって厳しい話も...



熱心に聞き入る参加者達

強まっていると指摘した。

電子ジャーナルを購入する利点としては、1)「もの」(書籍・雑誌)を購入・管理する必要がない、2)ひとつの論文を複数人で同時に読むことができる、3)冊子をまるごと買わなくても必要な論文のみ読むことができる(冊子よりサービスの単位が細かい)、を挙げた。

以上のような状況を踏まえ、欧米出版社の先進的な事例を紹介し、日本の学術情報・専門書出版社に対して、既存のやり方から脱却して新しいビジネスモデルを構築する必要性を説いた。具体的なビジネスモデルの構築は各出版社に委ねるとして、何より「『もの』ではなく『情報』を売る」という、紙媒体に固執しない意識を持つことが大事である、と土屋氏は強調した。

講演を聞いての感想を付記すれば、新しいビジネスモデルのひとつとして、雑誌のパッ

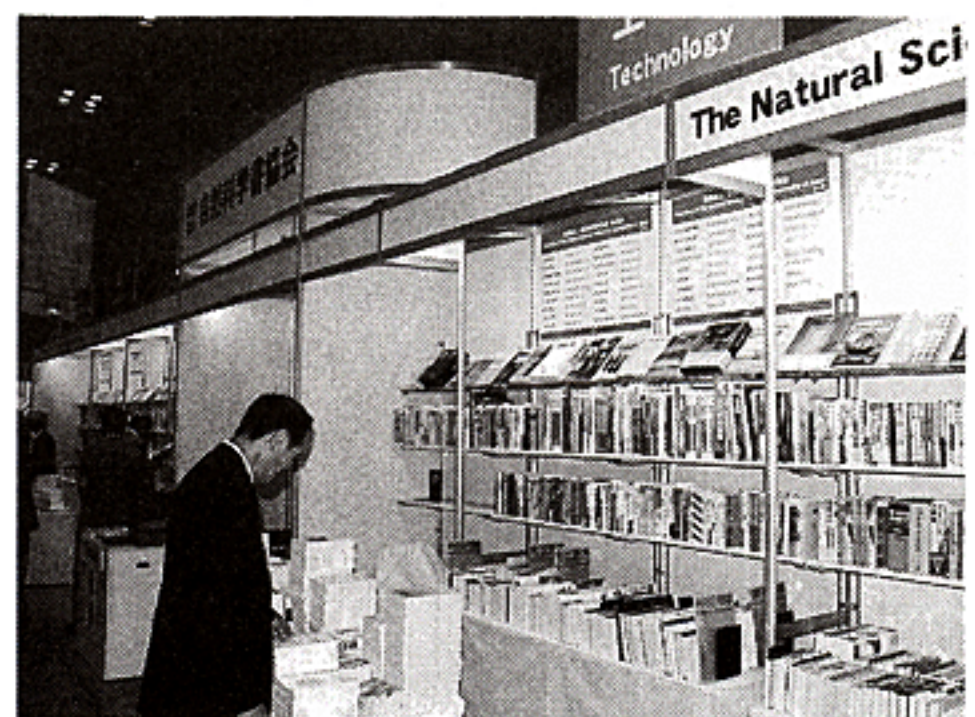
クナンバーと年間購読、雑誌と書籍のセットなど、媒体やジャンルを組み合わせるパッケージしたものが考えられようが、著作権や利用法をめぐるライセンス契約、コスト、取引先の環境や数などの問題も多く、現段階でこれらを実現することは困難と思われる。ただし、時代の流れは着実に変わっていることと、欧米の企業が実際にビジネスとしていることは押さえておかなければならないポイントであり、今後もハードウェアの開発やニーズの状況を把握しておく必要性を感じる。

第13回東京国際ブックフェア2006を振り返って

販売・出展委員長 平田 直

恒例の第13回東京国際ブックフェアが7月6日(木)から9日(日)までの4日間、東京ビッグサイトで開催されました。主催者側からの発表によりますと、出展社数は726社、来場者数は54,370名で過去最多だったようです。また海外来場者登録実数も昨年の1,030名から今年は1,348名へと増加しています。

さて、わが自然科学書協会の概要を数字のうえで説明しますと次のようになります。出品社数は昨年と同数の64社でした。出品点数=2,340点(昨年=2,429点)、売上部数=358部(昨年=371部)、売上金額=1,106,286円(昨年=1,124,029円)で、ほぼ2005年と同様の結果でした。協会加盟の出版社がカバーする分野としてすでに定着している「理学・工学・農学・家政・医学」の5分野の出品冊数と売上冊数、さらにその販売率をまとめたのが次頁



自然科学書協会のブース

東京国際ブックフェア2006 分類別出品・売上一覧表

分野		出品冊数	売上冊数	販売率
A 理学		563	112	20%
A-1	科学一般	72	17	24%
A-2	数学	101	31	31%
A-3	物理学	85	19	22%
A-4	化学	54	8	15%
A-5	地学・天文学	60	10	17%
A-6	生物学	167	26	15%
A-7	その他	24	1	4%
B 工学		785	113	14%
B-1	電気・電子	112	11	10%
B-2	機械・金属	93	19	20%
B-3	土木・建築	239	37	15%
B-4	化学・バイオ・環境	131	18	14%
B-5	経営工学（ISO、品質管理など）	12	2	17%
B-6	情報科学・コンピュータ	103	12	12%
B-7	その他	95	14	15%
C 農学		359	18	5%
C-1	農学・農業一般	89	3	3%
C-2	農業工学・土壌・肥料・病虫害	41	2	5%
C-3	畜産・林業・水産	23	3	13%
C-4	獣医学・比較医学	36	0	0%
C-5	農産・食品加工	9	0	0%
C-6	園芸	156	10	6%
C-7	その他	5	0	0%
D 家政		197	29	15%
D-1	食生活（食物栄養学全般）	170	27	16%
D-2	家族の生活（保育・福祉含む）	14	2	14%
D-3	衣生活	6	0	0%
D-4	住生活	2	0	0%
D-5	その他	5	0	0%
E 医学		834	86	10%
E-1	医学一般	311	37	12%
E-2	臨床医学（内科系）	136	7	5%
E-3	臨床医学（外科系）	64	3	5%
E-4	看護・リハビリテーション	187	24	13%
E-5	その他	136	15	11%
合計		2738	358	13%

割引販売の売上部数 225冊
定価の売上部数 133冊

の表です。この表からどのようなメッセージを汲み取るかは、それぞれの受取り方と併せてなかなか興味の尽きないところです。

反省会で委員から出された意見のなかで皆様にお伝えしたいことに、“来場予定者からあらかじめ出品希望の出版物を確認しておく”という方法があります。それで寄せられたエンドユーザーからの高価本を出品して、現実に読者に喜んで買ってもらった例もあるそうです。現在ほとんどの出版社の出品が新刊中心ですが、一考に価するかと思います。

会期中の売上金額の高い順に8日（土）、9日（日）、6日（木）、7日（金）という結果でした。また著作権の照会は協会全体で1件でした。各刊行会より提供（300～400部）いただいた目録は、若干の残部が生じたものの、例年通り有効に活用されたようです。

レイアウトについては会員社の方々にも好評で、すでに定着している分野別、小分類を

踏襲しました（当協会ブースの写真）。ただ、これまですでに4年間使用しましたので、来年はレイアウト委員会を中心に一新する予定です。会員社で優れたアイデアやデザインセンスのある方はぜひ、販売・出展委員まで気軽にご意見をお寄せください。

来年の第14回東京国際ブックフェア2007は7月5日（木）～8日（日）の期間、東京ビッグサイト西展示棟で開催される予定です。

北京国際ブックフェアに参加して

—海外出展社数が大幅増の背景—

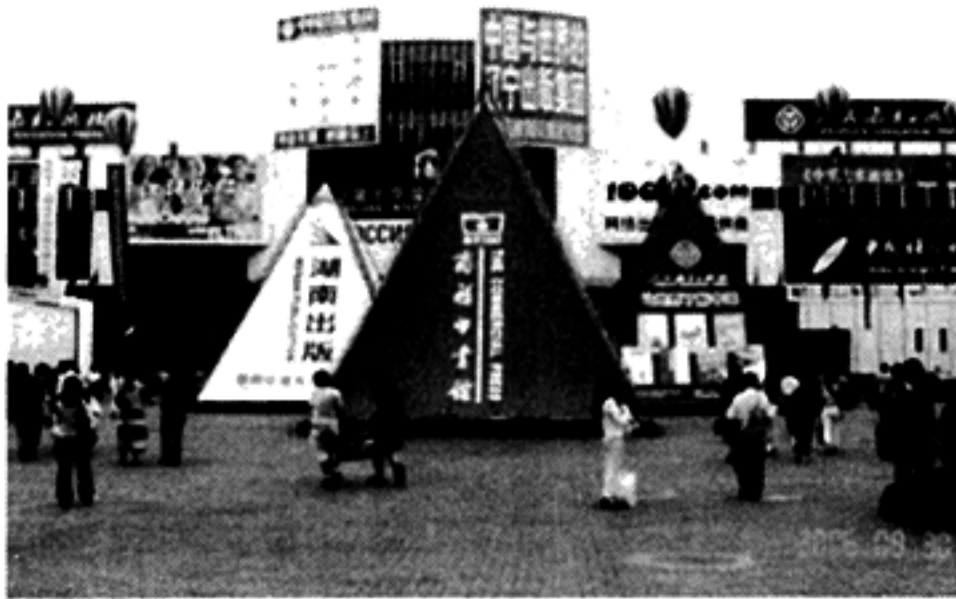
緑書房 森田 猛

北京は、2年後にオリンピックを控えて、建造物のスクラップ&ビルドや道路工事、観光名所の補修工事などが盛んに行われ、街全体が変貌を遂げようとしている最中である。3年続けて訪れているが、肌で感じる中国経済の活気は年々増している。

北京国際ブックフェア（BIBF）は今年、初開催から20周年を迎え、第13回目である。高い経済成長を背景に、昨年よりもさらに規模が拡大した。8月30日から9月2日までの4日間で、入場者数は前年比169%の22万人。昨年からは会場となった中国国際展覽センターには、例年以上のPR活動の成果とかで、一般客が大幅に増えていたようである。総出展社数も1,718社で、前年比115%と昨年より増加。とくに海外出展社数は1,207社で、前年比120%と大幅に増えており、中国の出版市場に寄せられる海外出版社の高い関心がうかがえる。



会場正面の入口



会場正面は今年も中国らしい装いで



自然科学書協会の共同ブースには169点が展示



日本事務局のブース

しかし、日本の出展社数は131社で、前年比98%と減少しており、日本ブースのフロアも昨年は2階に位置していたが3階に変更となり、出展ブース数も38から36に減った。ロシアが今回のCountry of Honourで、ロシアをはじめとした海外ブースや中国ブースは、国や地域ごとに華やかで趣向をこらした展示をしており、多くの人で賑わっていたが、それに比べて日本のブースは地味で人が少なく、寂しいという印象だった。

このことにも、中国の出版社との著作権ビジネスに対する、諸外国の出版社と日本の出版社の認識の違いが現われていると感じられた。ただし、自然科学書協会加盟社にかぎっては、前年通り設定された共同ブースに、前年を3社上回る23社が出展し、出展点数は去年の123点から169点へと増加した。なお、昨年と同様に、当協会関連12分野の目録各50部ずつ計600部が、当協会と日本事務局のブースで配

布された。

さて、活気づく中国出版界であることに間違いはないが、中国の人口を考えればどの分野もまだまだ種類、点数、部数ともこれからといったところだろう。著作権売買の交渉をしても、印刷代がまだ高額であるという理由から、フルカラーの書籍を1色で出版することは可能かなどと聞かれることが度々あった。実際、装丁はたいへん立派にデザインしてあっても、中は薄い紙に荒いモノクロ印刷という本が中国には多い。ただ、それでも10年くらい前に比べると本の出来の良さは格別であり、わずか数年でDTP化も急速に進んだのだから、近い将来、フルカラー印刷のコストも大きく下がっていくだろう。

中国の出版社はちゃんとした販売データを出してくれず、ビジネスとしては難しいという声も日本の出版社には多いが、中国の出版がいろいろな意味合いで進化しているのは間違いのない事実で、日本の出版社もその進化の度合いをしっかりと見つめ、かかわりを持っていくことが肝要と思われる。

次回2007年は、同じ会場で8月30日から9月3日まで開催される。

2006年フランクフルトブックフェアの印象

建帛社 筑紫 恒男

会期前日の10月3日にフランクフルト着。この日はドイツ統一記念日の祝日ということで、店はほとんどが休み、飲食店も開いているところが少なく、町は閑散としていた。



メッセ入口



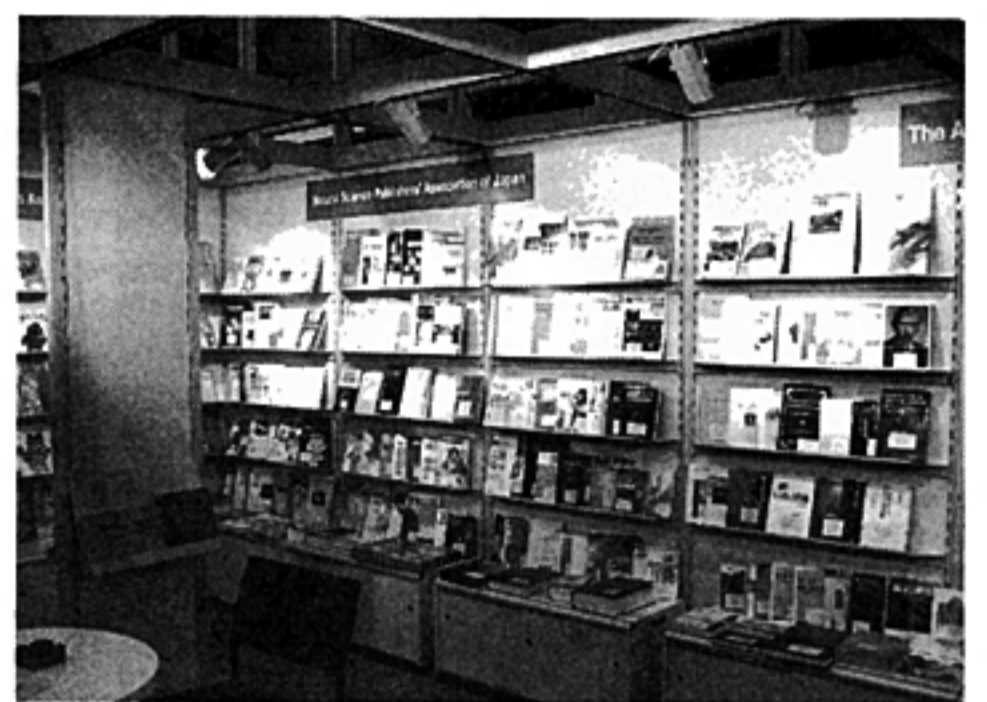
日本会場

第58回フランクフルトブックフェア（FBF）は2006年10月4～8日の5日間、フランクフルトで開かれた。4日～6日は関係者のみの参加で、一般は7・8日の2日間となっており、また本の販売は最終日にしかできないことになっている。

FBFはメッセのほとんどの建物を使用して開かれている。今年は今までで一番の規模とのことであり、東京ブックフェアの10倍以上はあり、世界各国から出版関係者が集まっていた。会場に入るとそのスケールの大きさに圧倒された。と同時に、大きな会場であるにもかかわらず、比較的静かな雰囲気であることに気づいた。著作権販売のフェアであるため、各ブースで商談が行われていることによる。本の販売を行っている東京・北京などとは大きな違いだ。

会場は、ドイツ館、国際パビリオン（国別・言語別）のほか、学術出版社フロア（Academic & STM）、コミックセンター、テーマ国（今年はインド）と分かれている。日本会場は出版文化国際交流会（PACE）が組織し、単独ブースは岩波書店、オーム社など12社。PACE共同ブースに当協会、出版絆会、大学出版部協会、児童図書出版協会などの本が展示されている。学術出版社フロアには、医学書院、総合医学社、南江堂、培風館、丸善などが単独ブースを出している。その他コミックセンター、エージェントセンターなどに日本の社のブースが見られる。

当協会のコーナーには24社51点の書籍が見やすく展示されており、4団体合計では119社237点の書籍が展示されていた。図鑑などに



自然科学書協会のブース

については翻訳の問い合わせがあるそうだが、文字中心の専門書になると残念ながら問い合わせは少ないようだ。

FBFの参加国は113カ国、出版社数は7,272社（内ドイツ3,288社）、出展タイトル数382,466点との発表があった。アジア圏では、中国135社、香港16社、インド49社、韓国28社、シンガポール22社などと比べると日本の45社は、日本会場の面積ともども寂しい印象

会員社HPから協会HPへのリンクを！

当協会のホームページ（HP）はアクセス件数が非常に少ないことが明らかになりました。これを改善するために、情報システム委員会では魅力的な内容作りや頻繁な更新などを進めています。会員各社のHPから協会のHP（<http://www.nspa.or.jp/>）へリンクを張っていただくことが、今すぐ実行できる有効策です。ぜひ会員社の皆様のご協力をお願いいたします。なお、協会HPから会員社へのリンクはすでにすべて張られています。（広報委員会）

をも。

出版がその国の文化を支えているという自負を持って出版活動をしていることを考えた時、日本の出版社ももっと外国に向けて情報を発信し、出版を通じての文化交流に積極的にかかわらなければならないのではないかとの思いを強くした。

オンデマンド印刷の実情把握見学会

録書房 鈴木 健之

書籍出版は小ロット・多品種がいやおうなく進んでいるが、ロットに応じた印刷方式としてオンデマンド印刷の需要が少しずつ伸びているという。品質に問題があるとされてきたが、新型の機械も開発されているとのことで、実情把握のため、自然科学書協会は6月16日、トーハンと凸版印刷が共同出資して作ったデジタルパブリッシングサービス社(DPS)のプリントオンデマンド(POD)工場見学会を行った。

同工場は凸版印刷板橋工場内にあり、午後3時から開催、当協会加盟の27社49名が参加した。

はじめに、会議室で凸版印刷の岩崎興次常務とDPSの佐藤俊之社長から、小ロット印刷・オンデマンド出版印刷へのフルサポート体制での取り組みについての話があった。

ついで、POD工場で現在稼働中の本文印刷機(1C)、カバー・付き物印刷機(4C)および新印刷機(富士ゼロックス495J)を見学。オンデマンド出版の現品見本の紹介も受け、製本現場も見せてもらった。このあと、凸版印刷の小ロット印刷工場に回り、エコノ



工場内では丁寧な説明を受けた

ミーライン、オフセット印刷機、無線綴じラインを見学した。

最後にふたたび会議室で、DPSの門屋真一取締役から「書籍のトータルライフサポート」ということでプレゼンテーションがあり、質疑応答ののち、散会した。

オンデマンド印刷は、在庫レス生産のメリットだけでなく、章単位での抜き刷り冊子の作成、ソースデータを元に中高年向けのワイド版の作成、プルーフ本への利用など、多様な応用も可能なことが分かり、有意義な見学会だった。

年末会員集会開催のお知らせ

当協会恒例の年末会員集会が12月6日(水)18時より、東京會館(千代田区)11階ゴールドルームで開催されます。取次・関連業界の方々が多数出席されますので、相互交流を深める夕べとして、会員代表者、各専門委員会委員の皆様のご参加をお願いします(会費は、1社1万5,000円)。

【事務局より】

- ◆ 年末会員集会
日時：2006年12月6日(水) 18時より
場所：東京會館
- ◆ 新年会員集会
日時：2007年1月18日(木) 12時より
場所：日本出版クラブ会館

編集後記

団塊の世代が定年を迎える2007年問題。自然科学書協会は、一足先に「還暦」を迎えた。

還暦といえば、赤いちゃんちゃんこを着て、孫を抱いた好爺爺というイメージ。ところがどっこい、団塊の世代の還暦はとんでもない。

某大手広告代理店による団塊世代の定年後のライフスタイル調査によれば、「定年は新たな出発」であり、「仕事」も「ボランティア」も「趣味」も生涯現役スタイルを望んでいるとか。アクティブシニアと呼ばれ、まさに活動的である。

同世代の自然科学書協会もかく在りたい。還暦の意味は、再び生まれた年の干支に還ることとか。

創立60周年記念号に寄稿していただいた先達の活動に学びながら、新生・自然科学書協会として、新たな出発の一步を踏み出したいものだ。ちょいワル・アクティブシニアとして。(H.Y)

第55期/第56期広報委員

- <担当常務理事> 南條 光章(共立出版)
- <委員長> 宮部 信明(岩波書店)
- <副委員長> 後藤 武(彰国社)
森田 猛(録書房)
- <委員> 井上昭彦(朝倉書店)・池田富士太(科学新聞社)・長 滋彦(技報堂出版)・柏原徹二(南江堂)・小浴正博(恒星社厚生閣)・新谷滋記(工業調査会)・田中久米四郎(電気書院)・三宅恒太郎(彰国社)・安原仁(家の光協会)・柳澤則雄(永井書店)